



語りつぐ藍と愛

「豊かさつて何だろう①」

「檻襷（らんる）」とい、裏に広がる縫い目いう言葉をご存知だろや「つぎはぎの美」は、うか。私は一枚のチラ暮らしをつましく支シを見るまで知らなかつた。広辞苑には「ぼの祈りであり、絆（きずな）の記憶である」とチラシにある。

大切に使い込まれた「ぼろ」、色あせながら秀子さんから「語りつぐ藍と愛」の展示会の在住の染色家、鈴村

えた女性たちの家族へピラートで開かれた展示会に手づくりケーキを持って訪ねた。以前届けた時、私のケーキを芸術品とまで言って下さる。お世辞とわかつていてもうれしい。蛇足ながら人をほめることは大切なことである。

さて、藍と愛の会の会長平安や室町時代ともしておられる鈴村さんは檻襷に魅せられるという。ぼろぎれの大半は藍染、この貴重な藍の布たちは破れてもなお美しい持ち、つぎはぎの縫つた衣類に強い家族愛があると語られる。

今日の物質的に豊かな時代に比べると、はるかに貧しかった。しかし、自然や周囲の人道な暮らしの中に、檻襷を大切にする文化がわかれていると、豊かさがあった。

サビエル主誕五百



招待券とともに

米寿、現役と

して活躍され、

今年も日本現代

工芸美術展で内閣総理大臣賞を受賞された。在

職中、ラジオ番組に出演しても

檻襷のチヨツキ

今日の豊かさは、使

い捨て、他人との交わ

りも薄れさせ、精神的

な豊かさまで失われて

いないだろうか。だか

ら鈴村さんは「藍と愛の会」という会をつく



展示された布や古いの信者ということもあり、以来親しくしている。ただいている。

早速、防府市のアスチラシの中には心を引きつける言葉が数多くあつた。

その布は捨ててはならぬ」「ひと針ひとつにこめられた母の祈り、

「豆三つ包めたら、

二〇〇四年、アフリカで植林活動に尽力し

「豆三つ包めたら、

二〇〇四年、アフリ

引きつける言葉が数多くあつた。

「豆三つ包めたら、

「豆三つ包めたら、

二〇〇四年、アフリ

引きつける言葉が数多くあつた。

「豆三つ包めたら、